

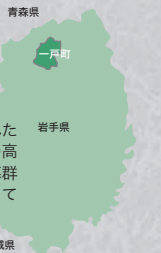
本町に先駆けデマンド型交通を導入した

岩手県二戸郡一戸町 いちのへいくべ号



岩手県一戸町を走る「いちのへいくべ号」今年1月から運行を開始したデマンド型の公共交通だ。このシステムを採用した理由は町の人たちの反応はデマンド型が走り出して3カ月新しい交通の形が定着しつつある一戸町に聞く

岩手県二戸郡一戸町
町の人口 15,335人（平成21年2月1日現在）
町の面積 300.11km²
町のキャッチフレーズ 「白と緑のエッセイ」。
一戸町は、西岳、高森高原など、雄大な自然に囲まれた町。南西部に位置する奥中山高原では、レタスなどの高原野菜栽培や酪農が盛ん。大規模な縄文中期の配石墓群と集落跡が見つかった御所野遺跡では、史跡公園として整備が進む。



一戸町の新たな「生活の足」公共交通空白地帯の解消へ

一戸町を走るいちのへいくべ号は、町内のタクシー会社やバス事業者で組織する有限責任事業組合「一戸町デマンド交通」が運行しています。昨年の12月11日から26日の間、無料で試験運行を実施。その結果を踏まえて、今年1月5日から本格運行に移行しました。

この「いくべ号」は、10人乗りの車両4台を使用したデマンド型交通システムです。利用者が、事前に電話などで予約。当日、指定した場所から目的地までを乗り合い方式で送迎します。

運行は、町内を4つのエリアに分け、原則としてエリア内の乗車料金は300円。エリアを一つ越えるごとに200円を加算します。料金はチケットで支払います。

予約の込み具合によって、道順や到着時間変動する事があります。しかし、バス並みの料金とタクシーのような便利さを併せ持つところが、大きな魅力となっています。

デマンド型交通システムは、公共交通の空白地域の解消につながります。高齢者を中心に、新たな「生活の足」として、地域住民から好評を得ています。

「登録者は既に人口の1割以上。デマンド型交通が、地域の活性化につながれば」



一戸町デマンド交通 梅垣文夫代表

デマンド型を運行し始めたころは、少時間がかかっても確実に乗れて、スムーズな運行ができませんでした。典型的な中山間地域、集落が点在する一戸町の地域性に合った交通システムだと思います。

利用者の登録数は、すでに人口の1割以上の2,200人。現在も増え続けています。今後は、地域との話し合いの中で課題を検討し、現在ある4台の「いくべ号」の、効率の良い運行を目指します。

利用者からは、「とても便利で大変ありがたい。これからはいくべ号を利用して、どんどん町へ出たい」という話も聞いています。

デマンド型交通の特長は、「好きな時間帯に目的地に出かけられる。多

少時間がかかっても確実に乗れて、スムーズな運行ができませんでした。典型的な中山間地域、集落が点在する一戸町の地域性に合った交通システムだと思います。

利用者の登録数は、すでに人口の1割以上の2,200人。現在も増え続けています。今後は、地域との話し合いの中で課題を検討し、現在ある4台の「いくべ号」の、効率の良い運行を目指します。

検討を続ける南部路線

南部路線は、旧中川根町の時代に運行していた「せせらぎ号」「やませみ号」の運行ルート。ダイヤで、現在まで運行している。この2本の路線については、ダイヤの見直しなど、小規模な改正を段階的に実施してきた。担当課では、「今年の9月に運行契約の更新時期を迎えます。これを機に、車両、ルート、ダイヤなど、全体的な見直しをしていく予定です。会議や委員会の場で検討を続けていきます」と話している。

乗降調査で見えた実態

365日、年中無休で巡回する南部路線。最近、運転手以外には誰も乗っていない状態で走る姿を見かける。運行にかかる経費に比べ、運賃収入は驚くほど少ない。県からの補助も受けているが、町の予算を投じなければ運行できないのが実情だ。担当課では昨年の9月、1カ月間にわたって乗降調査を実施。利用者数や、バス停別の乗降者数など、南部路線の利用実態を調べた。

に換算すると24・6人だった。やませみ号では、1日当たり4・4人の乗降だった。乗降の多いバス停を見ると、集会所や役場などが集まる場所、病院やJAなど生活に密着した場所、または鉄道駅前のバス停などに乗降は集中していた。時間帯別では、朝方の利用が最も多く、次いで夕方、昼間の乗降は極端に少ないという結果だった。

この調査から見えてくる南部路線の利用実態。

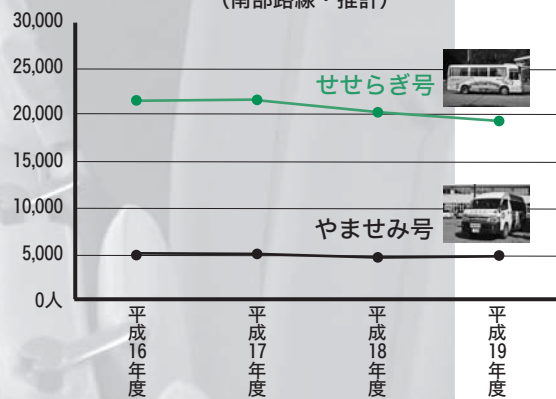
利用者の大半は、通院や通学、各地区集会所での催し、役場への届け出などのためにバスを利用している。このため、朝・夕の行き帰りに乗降が集中するのだ。またこれらのバス停は、周辺に民家や施設、商店が多いため、利便性が高いという一面もあるだろう。鉄道駅の乗降者数が多いのは、町営バスと鉄道を乗りつぎ、町外へ出かける人が多いからと考えられる。逆に、観光施設や無人の鉄道駅、民家が少ない場所などは、極端に乗降が少なかった。

せせらぎ号とやませみ号について、年間利用者数の推移を調べた。結果、せせらぎ号は年々減少傾向で推移、やませみ号はほぼ横ばいという状況だった。

合併以前から中川根地区を走る南部路線「生活の足」として、重要な役割を担っている
しかし乗降者数は一日平均24.6人。年間の利用者数も年々減少傾向だ
現行路線の課題と可能性について考えてみる

課題の現行路線

町営バス利用者数の推移 (南部路線・推計)



路線ごとの利用者数の推移を表・グラフで表した。せせらぎ号を見ると、平成16年度には年間21,000人以上の利用者がいたが、17年度を境に減少しつつある。やませみ号は、年間約5,000人と、ほぼ横ばいで推移している。

路線/年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
せせらぎ号	21,488人	21,573人	20,165人	19,190人
やませみ号	5,039人	4,962人	4,584人	4,695人